



URL <http://www.hds-net.co.jp/jousenji/>

浄泉寺寺報

発行日 平成24年1月20日
 発行者 浄泉寺住職 赤羽根 證信
 住 所 大崎市岩出山字浦小路113
 電 話 0229-72-1168

新年を迎えて

浄泉寺住職 赤羽根 證信

南無阿弥陀仏

新春の候、ご門徒の皆様には常日頃、浄泉寺・成願寺護持にご支援をいただき、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

昨年は私共浄土真宗の宗祖親鸞聖人750回ご遠忌法要の記念すべき年であり、浄泉寺・成願寺では4月25日から2泊3日の予定で団参を計画しておりました。しかし、3月11日未曾有の大震災によりやむなく中止を余儀なくされました。

5月25日、どうやら落ち着いたことで数人でご遠忌に参詣、京都時代の法友との再会を果たし、京都嵯峨野になじみの店「奥嵯峨苑」を訪ねましたところ、ご主人に思ひもよらぬ「がんばれ東北!!」のメッセージ入りの組紐を沢山いただき、胸を熱くし11月に再会を約

束して参りました。

11月25日、本山報恩講に15名の方々と団参をいたし、念願だった750回ご遠忌法要への思いを果たし、奥嵯峨苑を訪ね感謝の意を表して参りました。

また、3月11日の大震災は私達の暮しや生き方考え方に大きな変化をもたらしました。

その中の、美智子皇后様が被災地を見舞った時のこと、被災者の一人から渡された水仙の花束のエピソードは感動的な出来事でした。

身近なことでは、仙台で会社を経営していた檀家さんが被災され、地元古川に事務所を移転して営業を再開、自宅の1室も事務所として使うためスペースを確保したいというところで、子供への音楽の夢を託した思い出深いグランドピアノを浄泉寺に寄進されました。

浄土真宗の教化活動の一環として「音楽による法要」が定められて100年ほどになり、以前から「是非実施して欲しい」と友人から勧められていたこともあり、このピアノが私を後押ししている様にも思えます。

これを機会に4月1日本山で行われる音楽法要に参詣見学し、浄泉寺で音楽法要ができる組織（合唱団）を作ろうと思っています。

こうして慌ただしく過ぎた1年、私が失いかけていた人間の闇と光の織りなす情念の深さを思い知らされ、未だ落ち着かず、今年の年賀状はともあたらたまれず、「原発はいらない!! 同朋なるいのちこそ大切に」と書き送ることにいたしました次第です。

これからもまだまだ苦渋と苦難の道のりがございましょう。お互いに助け合い励ましあつて、御同朋御同行、「念仏成仏これ真宗」の信の道を歩んで参る所存であります。

何卒宜しくお願い申し上げます。

合掌

越後の親鸞

責任役員 赤間 栄夫

流人としての越後での親鸞の生活は「延喜式」という律令の施行細則の規定に定められています。それによりますと「およそ諸国の

流人、良賤男女大小を論ぜず。一日米一升、塩一勺、来年の春にいたれば種子を量り給す。一秋の後は粮種ともに停む」ということです。要するに最初の年は米と塩が支給されますが、次の年の春には種子もみが支給され、それ以降はすべて自給自足の生活を送らなければならぬという大変厳しいものでした。

▼農耕の生活

京の貴族の子として生まれ、僧侶としての生活を送って来た親鸞にとつて、この地における生活は、これまでとは全く違った境遇であり、半年は雪に埋もれ、日本海から吹きすさぶ寒風、地を這うように大地を耕しながら生きる農民、

荒れ狂う海をものともせず乗り出す漁師、このような人々の中で生きていかなければならなかった親鸞にとつても、これまでの世界観そして人生観もまた吹き飛んでしまふほどの体験だったに違いなかつたでしょう。都育ちの親鸞にとつて農耕生活と吹雪に荒れる冬は大変な生活だったと思われま

す。この様な中で恵信尼と結ばれたものと考えられます。

▼親鸞の結婚

親鸞の妻については種々な学説があつて、例えば、結婚三回説、二回説、一回説等があり、その結婚相手についても上層公家であった九条兼実の娘・玉日姫説が一般的に流布しており関東における親鸞の旧跡寺院の中には、親鸞の妻として玉日を祀る廟を有しているお寺がかなりあります。

「吉川栄治の親鸞」なども、この

玉日を親鸞の妻として描いています。玉日姫は江戸時代になつてから流布した名前で根拠がないことが明らかになっています。

現代では恵信尼が親鸞の妻であつたことが定説として認められています。それは、大正10年に西本願寺の書庫より恵信尼が自分の末娘である覚信尼にあてた手紙が発見されたからです。

▼恵信尼の手紙

親鸞が弘長2年90歳で亡くなつたとき末娘の覚信尼が父の最後の様子などをしたためた手紙を母のもとへ送つたところ、その手紙を受けた恵信尼より、親鸞が生前どのような人であつたのか、思い出等を書き留めた返信の手紙が覚信尼の所へ送られてきて、その手紙を含めて8通の手紙が発見され、これらの手紙によつて分らなかつた様々な事実が明らかになり親鸞の妻が恵信尼であることが確定しました。

ただし、親鸞の妻が恵信尼だけだつたかという事は確実ではあ

りません。親鸞が六角堂で聖徳太子の夢告を受け、比叡山を降りたのは女犯を決意したということでしょう。ですから、親鸞が京都時代に妻帯をしていたという説は充分根拠があるといつてよいでしょう。しかし、それが一般的な夫と妻との関係であつたのか、あるいは親鸞にとつて文字通り「女犯」を意味しただけなのかは判然としません。また、親鸞は京都時代にはすでに恵信尼と結婚していたのだという説もありますが、恵信尼との結婚は越後に住んでからというのがいろいろな意味で本当のようには思ひます。

いづれにせよ、今日、親鸞の妻としてはつきりと確定できるのは恵信尼だけというのが定説です。恵信尼は、手紙より判断しますと親鸞より9歳若く、親鸞が流罪になつたときの恵信尼は26歳、結婚した時は27歳ころだつたと思われるます。

(親鸞の教えに学ぶ)

合 掌

本山報恩講に参詣して(投稿)

佐々木 芳雄

菩提寺浄泉寺の報恩講が11月23日終り、前から予定していました。本山報恩講に15名のご門徒の方々と参詣することが出来ました。

今年4月の宗祖親鸞聖人750回ご遠忌には夫婦で参詣しようと申し込んでおりましたが、3月11日の震災で団参が中止となり、今回やっと50年に一度のご遠忌法要に参加出来て本当に感激でいっぱいでした。当日11月25日、本山ご影堂はすでに参詣者で満席でしたが、私達東日本大震災被災者の席が正面最前列に設けられていました。

午後2時、200人ほどの僧侶の方々が、いつも読んでいる正信偈をあげるようになりましたが、節がいつものと違い難しく、小さい声で一緒に唱えました。

岩手県陸前高田に生を受け、縁あって岩出山の地に移り住んで50年、きわめて平凡な日暮しをしておりました。その間2男1女の親

となり、その一人の子を幼くして亡くしてしまい、人の世のいのちのはかなさを知らされました。その時住職さんが読んだ白骨のお文が耳から離れませんでした。その後温厚な義父母を送り浄土真宗の教えを学ぶ機会を得ました。

平成17年住職さんに薦められ本山同朋会館での研修に参加する機会を得て帰敬式を受けました。思ひもよらぬ仏縁に身が引き締まる思いでありました。

参詣の後本山記者から「被災者の一人として」とのインタビューを受け、生まれ故郷の陸前高田の様子などを話しました。今あらためてご本尊阿弥陀如来は尊いことであり南無阿弥陀仏と名のついている仏におまかせいたしますと、私は念仏する自分と共に生きていることを再認識し抛り所として生きねばと気付かせていただきました。ありがとうございます。

平成23年報恩講実施報告

報恩講は、浄土真宗の寺院では重要な行事で、宗祖親鸞聖人のご命日(11月28日)を縁として「聖人の教えに遇う」「聖人の徳を讃え、恩に報いる」法座として全国各地の真宗寺院で行われます。

本山では毎年11月21日から28日までの8日間、東北別院では毎年10月15日から17日までの3日間行われます。

浄泉寺報恩講は、毎年11月23日(祝日)に実施しており、今年も大勢の方々のご参詣をいただき盛大に行なわれました。

式の開始前には副住職奥様のピアノ伴奏で「真宗宗歌」を合唱し午前9時30分、副住職の調声による「みんなでお勤め」に始まり、赤間責任役員の挨拶に続き、午前10時に「ご満座勤行」が執り行われました。

ご満座勤行には組内のご住職が多数参集され、厳粛かつ盛大な勤行となりました。

午前11時にはご法話「地獄ざらい……」を、福島県会津坂下光照寺住職和田至紘師よりいただきました。琵琶の演奏を交えての師のご法話は、日常どこにでもあるような話題を平易なことばでわかりやすく話され、門徒の皆さんの胸に沁みわたるものでした。

最後に参詣者全員で「恩徳讃」を合唱し、その後、担当地区の皆さんが用意されたお斎をいただき散会いたしました。

ご参詣いただいた門徒の皆さんは、古川や鬼首から団体で参られたこともあり、その数100名以上にも及びました。

また、報恩講前に行う「おみがき」は、昨年から門徒の皆さんのご協力もあり一日で終わることができました。

役員、地区担当の方々、ご門徒の皆様を支えられまして、真宗宗派の一大事業「報恩講」を無事終了できましたこと、心から深く感謝申し上げます。

(住職)

別院報恩講参詣と湯瀬温泉の旅

10月16日「東北別院報恩講参詣と秋田湯瀬温泉の旅」が、浄泉寺成願寺17名の参加のもとに行なわれました。

午前7時30分浄泉寺を出発、古川を経由し、8時成願寺の参加者を加え仙台市に向かい、9時10分東北別院に到着しました。

当日の別院の行事は「2日目日中」、震災の影響で例年よりも参加者が少なく感じられました。その様な中、「正信偈草四句目下」「和讃」等を参加者全員で唱和し、北海道教区即信寺住職亀谷亨師の講和「往生極楽の道」を聴講し、最後に昼食をいただき参詣を終了しました。その後秋田県湯瀬温泉に向い別院を出発しました。

秋田への道中は天気にも恵まれ、時期もまさに紅葉の盛りに入らんとしており、車窓からは色付いた山々が我々を「ようこそ秋田へ」と迎えてくれているようでした。

午後5時湯瀬温泉「和心（なご

み）の宿姫の湯」に到着。一行の労をねぎらい懇親会が行なわれ、歌や踊りと楽しいひと時を過ごしお互いの懇親を深めました。

2日目の17日は、8時30分宿を出発し、先ず、岩手県北上市江釣子の通来寺に向かいました。

通来寺は、浄泉寺で昭和61年から10年間ほど行われた「親鸞教室」で、長期間講師としてご指導いただいた清谷和男師が住職を務められているお寺で、浄泉寺との深いかかわりのあるお寺です。

久しぶりにお会いした清谷師はお元気で、お話しぶりでも当時同様、気さくに私達に声をかけられ、奥様と共に明るく楽しく接していただき、1時間という時間が本当に短く感じられる再会でした。師は当日予定があるということで名残を惜しみながら12時に通来寺を後にし平泉に向かいました。

昨年「世界文化遺産」に登録された平泉は、紅葉シーズンともあつてか観光客も多く、大変な賑わいを見せていました。これが震災

復興への足がかりとなるよう祈りながら、私達一行は「中尊寺金色堂」「毛越寺」等を見学し帰路に着きました。（大坂 記）

年回表（平成二十四年）

一周忌	平成二十三年
三回忌	平成二十二年
七回忌	平成十八年
十三回忌	平成十二年
十七回忌	平成八年
二十三回忌	平成二年
二十七回忌	昭和六十一年
三十三回忌	昭和五十五年
三十七回忌	昭和五十一年
五十回忌	昭和三十一年
百回忌	大正三年

アミダさまって!?

「おじいちゃんアミダさまって男?女?」大晦日の年越しそばの席で小学2年生の孫の質問に家族中が沸いた。「どっちだと思う?」と私「わかんない…男のようでもあるし…女?…もしかするとオカマ!?!」一同笑「パパはわかるの?」「わかるよ」「じいさんもわかるよ、さあどっちかな?」子供への説明は難しい…。

よしあしの文字をも知らぬ人はみなまことのこころなりけるを善悪の字知りがおは

おおそらごとのかたちなり
親鸞聖人作 正像末和讃より

庁の埋蔵金の洗い出し等、国民に約束したことを具体化もせず言うにも程がある。コラムのご和讃は何を言っているのか知るべき、何よりも彼らに必要なのは「倫理観」。

こう思う私はへそ曲がりか!?

（寺報編集委員）

あとがき

昨年の大震災は大変な結果を引き起こした。自然災害である地震、津波による被害は致しかたないとしても、問題は原発。

学者、行政、議会、経済界と原発推進のため安全神話を作り上げ、被害想定を低く位置づけ、反対論を抹殺したため被害を大きくしたことは否めない事実だ。

さらには「復興のための消費税増税」とか…。天下りの根絶、行政改革、国会議員定数削減、各省